

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHHAKU

2013.5 No.76

トピックス

ミニ企画展の開催
江戸一目図屏風の実物公開

研究ノート

再建された天守閣 梶村 明慶
衆楽園と曲水をめぐる
いくつかの疑問点 小島 徹

お知らせ

平成25年度 行事予定
『町奉行日記』21の刊行



Tsuyama City Museum

津山郷土博物館

ミニ企画展を開催しました

① お正月を楽しもう

12月18日～1月27日



② 曲水の宴と衆楽雅藻

3月16日～4月4日



昨年12月18日から今年1月27日まで、「お正月を楽しもう」と題しておめでたい画題の掛軸や、お正月にちなんだ資料を紹介するミニ企画展を開催しました。

左の写真の掛軸は、狩野洞学の「猩々図」三幅対です。猩々は、朱色の毛に覆われた想像上の存在で、能の『猩々』という演目のなかでは、酒の精として登場し、親孝行の酒売りに、いくら酒をくんでもつぎることのない酒壺を残し



て去つていきます。このように酒と関わりが深いことから、「猩々図」の掛軸と一緒に、三つ葉葵紋漆塗金蒔絵盃や爛鍋など、お酒に関連するおめでたい道具類を展示しました。

その他にも、明治時代の初売出しの広告や、大正時代の雑誌の新年号附録のすごろく、昭和20年代の雑誌でお正月料理を紹介する口絵なども紹介し、昔ながらのお正月の雰囲気をお楽しみいただけるよう、工夫しました。



衆楽園での春の恒例行事となっている「曲水の宴」。その起源をたどれば、中国の上巳の節供にまでさかのぼりますが、津山においては、

明治3年（1870）に津山藩の関係者が実施したのが始まりとされています。この時に詠まれた漢詩や作られた書画は、「衆楽雅藻」という書籍に編集されましたが、それとほぼ同じ内容の巻物の一部が最近見つかり、話題になりました。

3月23日に曲水の宴が催されたのにあわせて、その巻物を初公開し、関連資料を展示するミニ企画展を開催しました。

本展では、「衆楽雅藻」の版本と版本、それと最近見つかった巻物をメインの展示資料と位置付けて準備してました。そうした中で、偶然その時期に市内の個人宅から引き取った屏風の中に「流觴曲水図」があるのが判明したため、これも展示資料に加えました。そして、曲水の宴の歴史と「衆楽雅藻」が出版されるに至った経緯を解説パネルにまとめ、また衆楽園の古写真や平成8年（1996）の第1回曲水の宴の記録写真をあわせて展示しました。

まるで桃の節句に合わせるかのよう、次々と関連資料が見つかった曲水の宴については、まだまだ不明な点も多いのですが、この展示をきっかけにして、当館でも調査研究を継続していきます。なお、5～7ページに関連する小論を掲載していますので、ご参照ください。

江戸一目図屏風の実物を公開しました

企画展「蕙齋が描いた日本・江戸・津山」

4月6日～5月6日



昨年5月の東京スカイツリー開業以来、来館者の皆さんから「本物の江戸一目図屏風を見たい」というご要望が高まっていました。あいにく昨年中は他館への貸出が続き、当館で展示できる機会がありませんでした。美作国建国1300年記念事業が本格的にスタートした今春、ようやく当館で公開できることとなり、あわせて蕙齋の他の作品も展示する企画展を開催しました。

本展では、蕙齋が得意とした名所絵に注目し、当館収蔵のそれぞれの作品を比較しつつ、彼の画業の一端を紹介しようと考えました。江戸一目図屏風に描かれた名所のうち33か所を11枚のパネルで具体的に紹介するなど、鑑賞の便を考慮した解説を施しました。

4月13日には、江戸一目図屏風の説明会を実施しました。研修室でプロジェクター投影の画像をご覧いただきながら、緻密に描きこまれた江戸名所を一つ一つご紹介し、予備知識を持ったうえで実物の屏風をご覧いただきました。

当館での実物の江戸一目図の公開は約1年半ぶりです。地元での公開を待ちわびた市民の皆さんや、スカイツリーで見たレプリカの実物に関心を持たれた観光客の方々など、多数の来館者で賑わいました。江戸一目図の前の腰掛けに座り、じっくりといつまでも眺めている方も、よくお見掛けしました。会期中にご覧いただいた皆さまに、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



説明会場の様子 100人近い方が詰めかけました。

再建された天守閣

梶村 明慶



津山城の天守閣は廃城令により明治7年(1874)から8年にかけて他の建物と共に取り壊され現在はその場所には天守台が残されています。

今年、美作建国1300年記念イベントの一環で、この天守閣の跡に模擬天守閣をつくる計画があるようですが、以前にも天守閣が作られたことがあります。

平成3年(1991)にアドバルーンで天守閣を再建されたことは記憶に新しいところですが、建物としては昭和11年(1936)に姫津線(現在の姫新線で津山く姫路

間)全線開通を記念して行われた「姫津線全通記念産業振興大博覧会」の目玉として建てられたことがありました。

ここに昭和11年に建てられた天守閣と、廃城前に撮られた天守閣の写真がありますが両方を見比べてみると随分形が違います。

すつきりとした形の元々の天守閣にくらべ、再建されたものは破風など元々の天守閣よりも装飾的に作られ、屋根には鯨も見えます。元々の天守閣は五重塔のように四方に延びる屋根を積み重ねたような外観で、最上階の屋根以外に



津山城天守閣古写真(部分拡大)

は入母屋破風がないものになっており、初期の層塔型と言われるものでした。

この層塔型の天守閣は、見た目は単純な作りですが天守閣を支える天守台の平面を正確な矩形にする技術が要求されるためその出現は関ヶ原の戦い以後と遅く、藤堂高虎により慶長15年(1610)京都府の丹波亀山城の天守閣として建てられたものが最初と言われています。

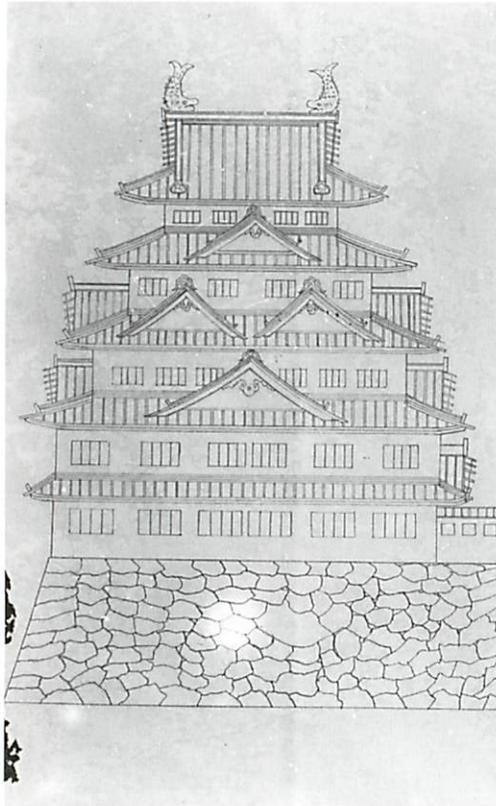
一方、再建天守閣の方は、天守閣を建てた博覧会の協賛会が設計方針として決定した文書を見ると、「天守閣は旧鶴山城の天守閣を再建するものに非ずして、博覧会のための臨時建設なれば美観第一のものにするも、あくまで歴史ある鶴山城としての威厳を保ち得るものたること」との一文があり、元々の天守閣を再現するのではなく、あくまで、イベント用として建てられたものようです。そのためその当時の人が持つ「天守閣」のイメージに沿った形になり、元々の天守閣と違った形になったと思われま

このような経緯で元々のものと違う天守閣が建てられましたが、この天守閣は博覧会終了後には取り壊される予定でした。しかし、諸事情により昭和20年にまで残ることになり、多くの市民から「はりぼて天守」の愛称で親しまれていました。



再建天守閣写真(部分拡大)江見写真館蔵

再建天守閣の側面図 江見写真館蔵



衆楽園と曲水をめぐるといつかの疑問点

1. 曲水の宴の歴史

津山市では平成8年(1996)以来、俳人の皆さんを衆楽園に招いて曲水の宴を催しています。今年も第20回西東三鬼賞表彰式の翌日、3月23日にのどかな日和の中、この雅な催しが開かれました(表紙の写真参照)。

古代中国で上巳の節供に行われた水辺での禊の風習が起源とされる曲水の宴は、やがて日本にも伝わり奈良平安時代には恒例の宮中行事として定着します。朝廷の権力が弱まる中世には廃れましたが、現在では、日本各地の庭園でかつての王朝文化を偲ぶ行事として再興されています。

ちなみに、数ある曲水の宴の中で最も有名なものが、永和9年(353)3月3日、書家として名高い王羲之が会稽山近くの蘭亭に文人たちを集めて催した「蘭亭曲水」です。この時に作られた詩集の序文が「蘭亭序」で、書道の世界では行書のすぐれた手本として珍重されています。

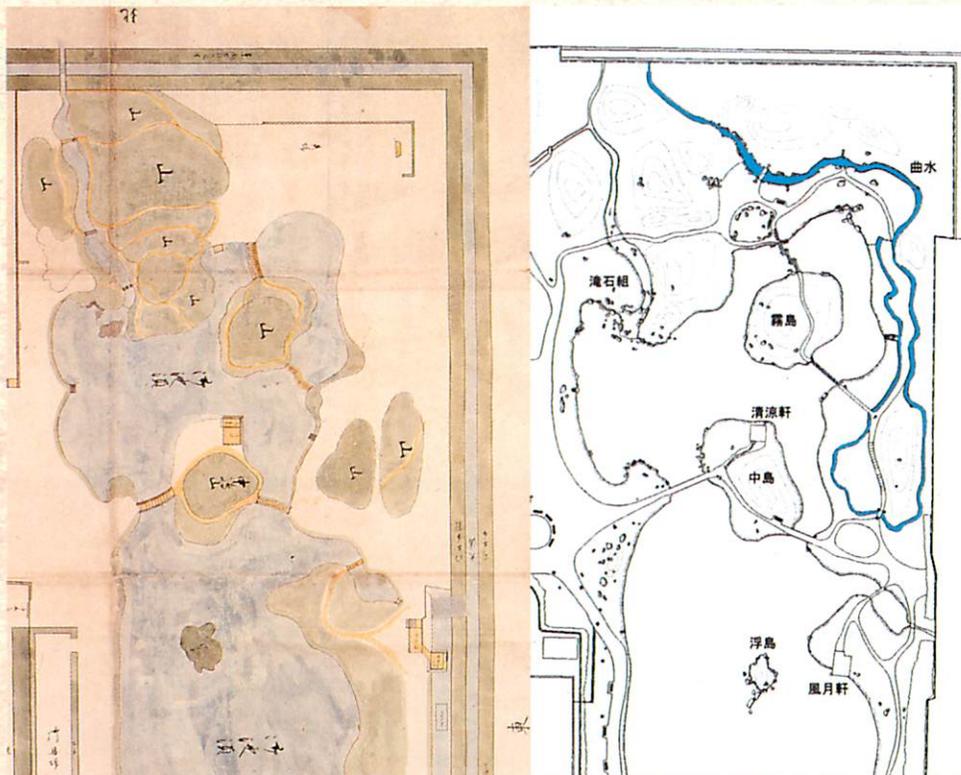
津山では、いつから曲水の宴が行われてきたのでしょうか?現時点で確認できる最古の事例は、明治3年(1870)3月2日、津山藩の関係者たちが衆楽園で催したものです。津山藩知事の後継者であった松平康倫が、漢学教授や自らの側近をはじめとする藩内の文人たちを衆楽園に

招き、蘭亭の故事にならって宴席を開きました。出席者は30人、うらかな春の日ざしの中で曲水のほとりに座り、上流から流される酒杯が自分の前に来るまでに漢詩を詠めなければ杯を取れない、すなわち酒を飲めない決まりでした。昼過ぎから暮れ時まで、時の過ぎるのも忘れて漢詩を詠みつつ、風流な酒宴を楽しんだのでした。翌年3月には開かれず、7月に廃藩置県となったため、津山における明治の曲水の宴は一度限りで終わりました。

2. 衆楽園の曲水はいつ造られた?

明治3年の宴席が開かれた場所は、単に衆楽園内としかわかりませんが、現存して今も使われているあの曲水が、おそらく当時も存在し、そこで催されたのだと思われれます。では、この曲水はいつ造られたのでしょうか?

明治の曲水で詠まれた漢詩などを収録して出版された『衆楽雅藻』の序文には、衆楽園が創設された森家の時代から、曲水は存在したと記されています。しかしながら、江戸時代の衆楽園内を描いた絵図を見ても、曲がりくねった水路はどこにも見当たりません。単にたまたま描かれなかっただけという可能性もない訳ではありませんが、現存する曲水の上



天保2年の御対面所絵図(左)と現在の衆楽園の平面図(北東部分の比較)

明治3年正月に「衆楽園」と命名されるまで、松平家の時代には長く「御対面所」と呼ばれていました。平面図上で青く着色した箇所が、現状の曲水を示しています。

※平面図は『旧津山藩別邸庭園(衆楽園)保存管理計画策定報告書』所収の図を加工したものです。

小島 徹



『衆楽雅藻』の版木(上)と版本

ことは考えにくいのですが、今のところ幕末期の津山藩の日記類では、曲水の造成も宴の開催も確認できません。仮に幕末のある時期に造成されたのだとしても、「造園当初から存在した」という『衆楽雅藻』序文との食い違いをどう解決すればよいでしょうか？ わずか数十年のうちの工事が、津山藩内で完全に忘れ去られるものでしょうか？ これが、まず一つめの疑問ですが、すぐ簡単に答えの出る問題ではなく、日記類の精読や新たな資料の発見がなくては解決できません。

3. 曲水詩集の巻物作成と

『衆楽雅藻』の出版

流部分(園の北東隅付近)には矢場(今の弓道場に当たる施設)があり、少なくとも曲水が現状と同じように存在したとは想定しづらいのです(前ページの写真・図面参照)。それに、この絵図は園内の泉水・島の配置や建物の間取りを詳しく記録しており、作成当時に存在した水路をあえて描かなかつたと解釈するのは、どう見ても不自然です。

それらの絵図のうち、年代がわかる最新のもの、天保2年(1831)の絵図です。では、それから明治初年までの約40年の間に、曲水が造られたのでしょうか？ 曲水の場合は用途が明確なので、それを新設したのに宴をいつまでも開催しないという

明治3年の曲水の宴については、主催者の松平康倫の指示により、詠まれた漢詩を集めた巻物が作成されました。当時の松平家の日記類に目を通すと、宴の直後から「曲水之詩稿」が藩内の漢学者たちに回覧され、批評が施された後、清書用と思われる「曲水御絹地」が出席者に次々と回されたことがわかります。そして、翌年4月12日に完成して注文主の康倫に上納され、その翌日に義父で藩知事の慶倫に披露されています。こうして出来上がった曲水詩集の巻物は、

さらに東京にいる旧藩主・確堂の元にも届けられました。彼は康倫の実父に当たり、当時は徳川亀之助(後の家達)の後見人を務めていました。確堂への巻物披露の時期は不明ですが、慶倫への披露から間もないうちのことと思われる。

この巻物ではないかと思われる資料の発見が、今年2月に地元新聞紙上で報道され、話題になりました(下の写真)。3月後半の当館のミニ企画展で一般に初めて公開されました(2ページの記事参照)。

巻物の完成後、時期は不明ですが、曲水の詩集の出版事業も始まり、「衆楽雅藻」と命名された冊子が作られました。松平家の日記によれば、明治6年1月に冊子の製本が仕上がりに、宴の出席者や巻物・冊子作成に関与した関係者たちに配られています。松平家伝来の和書・漢籍群「愛山文庫」には、実に173部にもものぼる『衆楽雅藻』の版本が残るほか、印刷用の版木も今に伝わっています(右上の写真)。ちなみに、津山銘菓の「衆楽雅藻」は、昔日の雅な宴席にちなんで、この書物から名前を取ったものです。

『衆楽雅藻』版本の内容は次のとおりで、二部構成になっています。

- 序文(上原存軒撰)
- ① ①題字「流觴曲水」(松平康倫書)
- ② 衆楽園流觴図(曲水宴図、植木幹画)
- ③ 「流觴記」(後藤立太郎撰)
- ④ 曲水詩集(30人分・32首)





松平確堂(個人所蔵写真)



松平康倫

II ①題字「翰墨遊戯」(松平康倫書)

②書画会図(清水谿山画)

③「書画会記」(赤松寸雲撰)

④漢詩(五言古詩、大村斐夫撰)

⑤書画(20人分)

このうち前半のIは、言うまでもなく曲水の宴の詩集です。後半のIIは、曲水の宴の4日後に、衆楽園の隣りの西御殿で開かれた書画会での作品集です。上原の序文によれば、こちらにも出版の前に巻物が作られ、曲水詩集の巻物とともに確堂に披露されています。

4. 『衆楽雅藻』 出版の意図は？

従来、津山における明治の曲水と『衆楽雅藻』の出版を語る際には、必ずと言っていいほど、廃藩を前にし

た君臣の惜別の情が込められている、との解釈がなされてきました。しかし、曲水の宴の実施は廃藩置県の1年以上も前のことです。明治4年の廃藩置県に先行して自ら藩を廃止したところもありますが、それはごく少数のことでした。少なくとも、曲水の宴を開催した明治3年3月の時点で、津山藩の廃止時期を具体的に何年何月とは誰も予見できなかったと考えられます。そうすると、出席者たちが惜別の想いを胸に抱いて衆楽園に集まったと想像するのは、早合点ではないでしょうか。果たしてどのような意図をもって『衆楽雅藻』が出版されたのか？これが、二つめの疑問です。

『衆楽雅藻』の序文を書いた上原は、次のような文章で締めくくっています。「この冊子が広く頒布され、永く忘れ去られぬことを望む。衆楽園の素晴らしい景観は存在しても、盛大な曲水の宴が催されたのは稀なことである。そこであえて概略を記し、後世の人に伝えるのである。願わくば、後世の人が今を振り返る様子が、今の我々が昔を顧みるのと同じであることを(原文は漢文、筆者訳)この序文を読む限り、曲水の宴を永く後世に伝えるという意図以外の、廃藩にともなう惜別の想いには一切触れていません。

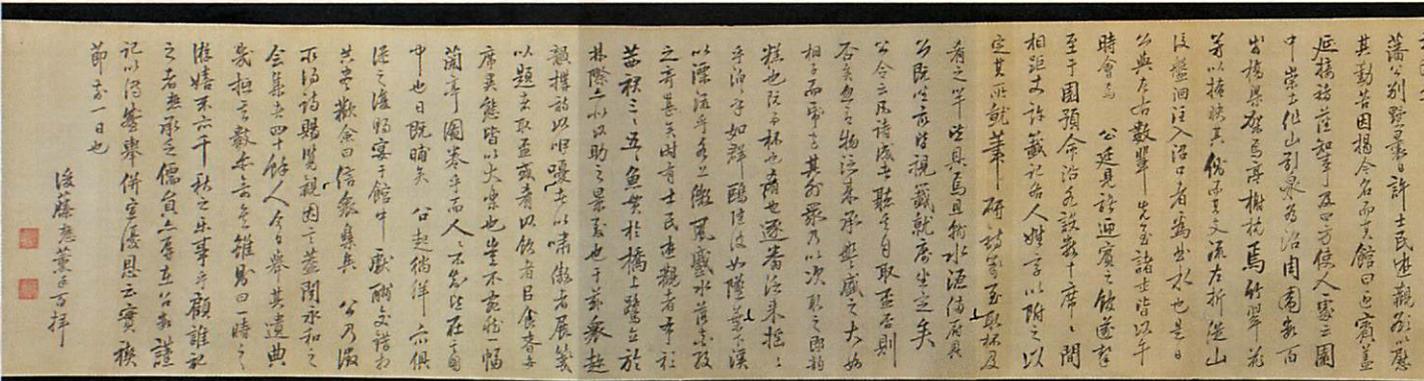
曲水の宴を主催した松平康倫は、廃藩直後に家督を相続し、明治7年からアメリカへ留学しますが、同10年に満21歳の若さで急死しています。

そのため、彼の人物像は定かではありませんが、実父・確堂の血を受け継いで彼もまた、詩歌や書画の嗜みを身に付けていたようです。曲水詩集の巻物が確堂にも披露された背景には、離れて暮らす実父に自らの成長ぶりを手紙に代えて伝えたいという康倫の孝心があつたものと思われる。

『衆楽雅藻』の序文には、遠く古い中国の風流な故事への懐旧・追慕と、稀な宴席を設けた康倫への賛辞が述べられています。その行間には、康倫をはじめとする出席者たちを、かつて蘭亭に集つた王羲之とその文人仲間になぞらえた心音が垣間見えま

す。近年稀にみる風流な催しをありのままに記録し、それを企画・主催した康倫を称賛すること、これこそが出版における最大のねらいであり、

たまたま追いかけるように発生した廃藩置県にともなう君臣惜別の念は、関係者の間で後から派生・付随した心情ではないでしょうか。『衆楽雅藻』の製本が完了して関係者に配布された明治6年1月には、奇しくも期を同じくして、太陽暦の導入にあわせて五節供の廃止が太政官から通達されています。後から派生した心情は、単なる惜別の念ではなく、「このように君臣が集つて一緒に上巳の節供を祝い楽しむことも、もはやないだろう」という節供儀礼へのレクイエム(鎮魂曲)も込められていたことでしょう。



衆楽雅藻(卷子本) 巻頭部分 個人蔵



平成25年度 津山郷土博物館 行事予定



特別展示

■特別展「美作の陶棺(仮)」

【会期】10月5日(土)～12月1日(日)

【会場】当館3階展示室

出版

- 特別展図録「美作の陶棺(仮)」の刊行
- 「津山松平藩町奉行日記」22の翻刻刊行
- 平成24年度年報の刊行
- 研究紀要の刊行

広報活動

■博物館だより「津博」の刊行

No.76：5月、No.77：7月、

No.78：10月、No.79：来年1月

教育普及活動

■古文書講座「美作の古文書をよむ」

5月16日(木)・6月20日(木)・7月18日(木)・
9月19日(木)・10月17日(木)・11月21日(木)・
1月16日(木)・2月20日(木)・3月20日(木)
全9回(8月と12月を除く)

■夏休み子供歴史教室

「陶棺をつくろう」7月24日(水)・8月13日(火)全2回
「カルメ焼きをつくろう」7月23日(火)
「勾玉をつくろう」8月6日(火)・7日(水)
「トンボ玉を作ろう」8月20日(火)・8月21日(水)

■文化財めぐり(友の会)

5月25日(土)・9月21日(土)・11月9日(土)・3月22日(土)
※11月は通算で第100回に当たりますので、それを記念して日帰りバス旅行を計画中です。詳細が決まりましたら、友の会の会員の皆さまにお知らせしますので、ご期待ください。

新刊のごあんない



◆「津山松平藩町奉行日記」21

¥800

今回は享和3年(1803)の日記の翻刻です。

5月に松江藩主の松平治郷(茶人大名の不昧)が参勤を終えて国元へ帰る途中で津山を通行しますが、津山宿泊の連絡が当日昼過ぎになって入り、関係者があわてて準備に奔走しています。

厳しい藩の財政事情により、10月からは家臣の俸禄が23～75%削減され、正月・五節句・八朔など津山城内の年中行事の礼式も経費を節約する形で簡略化されています。

大 博物館だより「つはく」
No.76 平成25年5月1日

津博
TSUYAHAKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail t-kyoudo@tsu-haku.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月27日～1月4日)・その他

【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。

大 は、津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章となっています。